長崎小品

芥川龍之介

薄暗き硝子（ガラス）戸棚の中。絵画、陶器、唐皮（からかは）、更紗（さらさ）、牙彫（げぼり）、鋳金等（ちうきんとう）種々の異国関係史料、処狭きまでに置き並べたるを見る。初夏（しよか）の午後。遥にちやるめらの音聞ゆ。久しき沈黙の後（のち）、司馬江漢（しばかうかん）筆（ひつ）の蘭人、突然悲しげに歎息す。

古伊万里（こいまり）の茶碗に描（ゑが）かれたる甲比丹（かぴたん）、（蘭人を顧みつつ）どうしたね？　顔の色も大へん悪いやうだが――

蘭人、いえ、何（なん）でもありませんよ。唯ちつと頭痛（づつう）がするものですから――

甲比丹（かぴたん）、今日は妙に蒸暑いからね。

唐皮（からかは）の花の間（あひだ）に止まれる鸚鵡（あうむ）、（横あひより甲比丹（かぴたん）に）譃（うそ）［＃「譃」は底本では「虖+言」］ですよ。甲比丹！　あの人のは頭痛ではないのです。

甲比丹（かぴたん）、頭痛ではないと云ふと？

鸚鵡（あうむ）、恋愛ですよ。

蘭人、（鸚鵡を嚇（おど）［＃「嚇」は底本では「嘛」］しつつ）余計（よけい）な事を云ふな！

甲比丹（蘭人に）まあ黙つてゐ給へ。（鸚鵡に）さうして誰に惚れてゐるのだい？

鸚鵡、あの女ですよ。ほら、あの阿蘭陀（オランダ）出来（でき）の皿の中にある。——

甲比丹、何時も扇を持つてゐる女か？

鸚鵡、ええ、あれです。あの女は顔こそ綺麗ですが、中々気位が高いものですからね。

蘭人、（再び鸚鵡を嚇しつつ）こら、失礼な事を云ふな！

甲比丹、さうか？　それは気の毒だな。（金象嵌の小柄の伴天連に）どうしたものでせう？　パアドレ！

伴天連、さあ、婚礼はわたしがさせても好いが、――何しろ阿蘭陀生れだけに、あの女の横柄なのは評判だからね。

蘭人、どうかもう御心配なさらずに下さい。（やけ

気味に）いざとなればあの種が島に、心臓を射抜いて貰ひますから。

種が島、（残念さうに）駄目だよ。僕は錆びついてゐるから、――サアベル式の日本刀にでも頼み給へ。

牙彫の基督、（紫壇の十字架上に腕をひろげつつ）無分別な事をしてはいけない。ふだん云つて聞かせる通り、自殺などをしたものは波羅葦増の門にはひられないからね。（麻利耶観音に）お母様！　どうかしてやる訳には参りませんか？

麻利耶観音、さうだね。ではわたしが頼んで見て上げようか？

伴天連、さう願へれば仕合せでございます。

甲比丹、どうか御尽力を願ひたいと存じますが、——（蘭人に）君からもおん母に御頼みし給へ。

蘭人、（恥しげに）何分《なにぶん》よろしく御願ひ申します。

鸚鵡、御恵《おめぐみ》深い麻利耶《マリヤ》様！　わたしからもひとへに御願ひ致します。

麻利耶観音、（阿蘭陀《オランダ》の皿に描《ゑが》かれたる女に）あなた！

阿蘭陀《オランダ》の女、何か御用ですか？

麻利耶観音、はい、実はこの若い方《かた》があなたを御慕ひ申してゐるのださうですが、——

阿蘭陀の女、まあ嫌（いや）です事。わたしはあの方（かた）は大嫌ひでございます。

麻利耶観音、それでも体さへ窶（やつ）れる程、思ひ悩んでゐるやうですから、——

阿蘭陀の女、それはあの方の御勝手（ごかつて）ではありませんか？　一体わたしは日本出来や支那出来の方（かた）は虫が好かないのです。

麻利耶（マリヤ）観音（くわんのん）［#ルビの「くわんのん」は底本では「くわんの」］、そんな事を云ふものではありません。あの方もあなたと同じやうに、西洋文明の命の火を胸の中に宿してゐるのですもの。云はば兄弟のやうなものでは

ありませんか？　どうかわたしたち親子も願ひますから、少（すこ）しは可哀（かはい）さうだと思つてやつて下さい。

阿蘭陀（オランダ）の女、（腹立たしげに）余計（よけい）な事は仰有（おつしや）らずに下さい。第一あなたさへ平戸（ひらど）あたりの田舎（ゐなか）生れではありませんか？　硝子（ガラス）絵の窓だの噴水だの薔薇（ばら）の花だの、壁にかける氈（かも）だの、——そんな物は見た事もありますまい。顔もあなたはわたしの国のおん母麻利耶（マリヤ）とは大違ひです。ましてあの方（かた）を御覧なさい。成程（なるほど）あの方もこの国では、阿蘭陀（オランダ）人と云ふかも知れません。しかしほんたうは阿蘭陀人どころか、日本人とも西洋人ともつかない、つまりこの国の画描きの拵（こしら）へた、黒ん坊よ

りも気味の悪い人です。

蘭人、ああ、何と云ふ情(なさけ)ない言葉だ！（涕泣(ていきふ)す）

阿蘭陀の女、（なほ怒の静まらざる如く）それがわたしを慕つてゐる、――よくまあそんな事が云はれたものです。おまけにあの方の一家一族――長崎画(ながさきゑ)に出て来る紅毛人(こうまうじん)も皆同じ事ではありませんか？　あたしはあの人たちの顔を見てさへ胸が悪くなつて来る位です。

長崎画(ながさきゑ)の英吉利(イギリス)人、法朗西(フランス)人、露西亜(ロシヤ)人等(ら)、（驚きし如く）おお！　おお！

麻利耶観音、ではどうしてもあの方とは仲好く出来ないと云ふのですか？

阿蘭陀の女、当り前です。わたしはもう今日（けふ）限り、あなたとも御つきあひは御免蒙（ごめんかうむ）りませう。古伊万里（こいまり）の甲比丹（かぴたん）、小柄（こづか）の伴天連（ばてれん）、亀山焼（かめやまやき）の南蛮女（なんばんをんな）、——いえ、いえ、それどころではありません。刀の鍔（つば）にゐる天使でさへ、二度と口を利（き）いて貰ひますまい。あの人たちとわたしとは生れも育ちも違ふのですから、——

麻利耶観音、（蘭人に）聞いてゐたらうね？　わたしの言葉さへ通らないのだから、所詮（しよせん）お前の願ひはかなはないよ。

蘭人、（涕泣（ていきふ）しつつ）はい、もう仕方はございません。

甲比丹（かぴたん）［＃ルビの「かぴたん」は底本では「かぷたん」］、

男らしくあきらめるさ。（亀山焼の南蛮女に）しかし憎い女だね。

南蛮女、ほんたうに高慢な人です事。――ようございますよ。これからはわたしがあの女の代りにこの方の世話をして上げますから。

伴天連、お前さんは何時もやさしい人だ。

基督、静かに！　静かに！　誰か人間が来たやうだから、――

鸚鵡、しつ！　しつ！

この家の主人、数人の客と共に戸棚の外に立つ。

主人、これがわたしのコレクション［＃「ヨ」はママ］

です。

客の一人(ひとり)、大分(だいぶ)沢山(たくさん)ありますね。この江漢(かうかん)の蘭人は面白い。

主人、其処(そこ)にあるのは亀山焼です。これはわたしの自慢の品ですが、——

客の一人、南蛮女ですね。阿蘭陀(オランダ)出来の皿の女より、余程(よほど)美人ではありませんか？

主人、これですか？（阿蘭陀の女のゐる皿を取り出す）おや、何か濡れてゐるが、——

客の一人、まさか阿蘭陀の女が泣いたと云ふ訳でもありますまい。

客の他の一人、いや、悪口を云はれたから、口惜し泣きに泣いたのかも知れません。（笑ふ）

客の一人、一体日本出来の南蛮物には西洋出来の物にない、独得な味がありますね。

主人、其処が日本なのでせう。

客の一人、さうです。其処から今日の文明も生れて来た。将来はもつと偉大なものが生れるでせう。

客の他の一人、この蘭人や南蛮女も亦以て瞑すべしですか。——おや！

主人、どうしたのですか？

客の他の一人、何だかあの基督が笑つたやうな気が

したのです。

客の一人、わたしは麻利耶（マリヤ）観音（くわんのん）が笑つたやうに見えた。

主人、気のせゐでせう。

主客（しゆかく）静かに硝子（ガラス）戸棚の前を去る。再びかすかにちやるめらの音。

（大正十一年五月）

底本：「芥川龍之介作品集第三巻」昭和出版社
１９６５（昭和40）年12月20日発行
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年1月26日公開
２００４年3月6日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。